

人権ネットワーク八幡

NEWS

事務局 〒523-0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
 電話 【携帯】 080-2525-7114(高坂)
 【メール】 Tko.koj1224@yahoo.co.jp

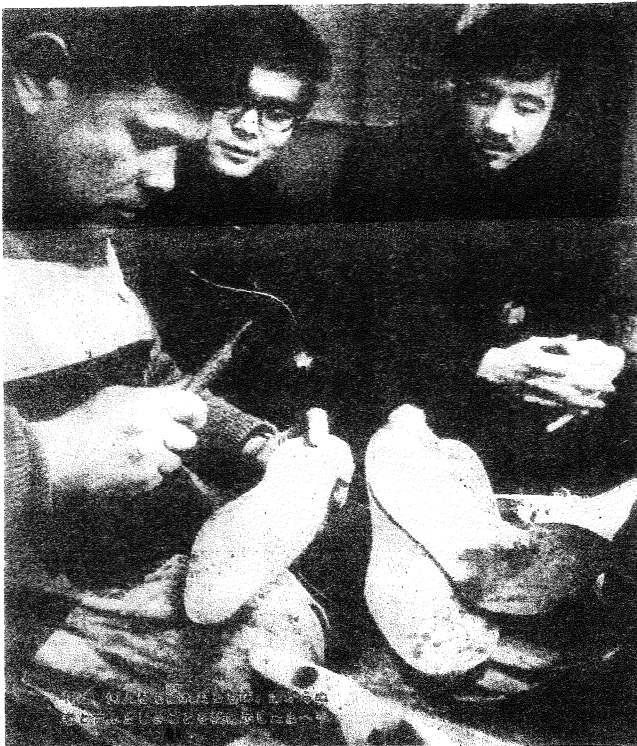
前略、再度同志社大学神学部の図書館に行き、資料を探索したところ、またおもしろいものが出てきました。『月刊キリスト1969年5月号』、部落解放同盟八幡支部が取材されていました。執筆者名の記載はありません、この月刊誌の編集記者だと思えます。

また、西井さんからリクエストがあった、前回の解放キャンプの記事の執筆者も探しましたが、目次には記名がありませんでした。ただ、編集後記のところ解放キャンプの取材をしたことが書かれていました。記者名は (わ) とありました。 鳥井新平

<ARCHIVE / アーカイブ>

明日をつくる仲間

部落解放同盟八幡支部



<この写真の下の文字

「神は、何人をも穢れたるもの、深からぬ者と云ふまじきことを我に示したまへり」とあります>

小学校や中学校で起きる殴打事件、窃盗事件、脅迫事件、強盗事件なども、この論理から起こされる。この論理によってかぶせられる苦しみへの、無意識の自己防衛の姿勢がこれらの事件ともなる。そこでは、単なる禁止命令や、権威の押し付け、人が良いだけのゆずり合いは通用しない。経済の不安定、家庭の不安定、周囲の白眼視がこの子どもたちの粗暴の原因だということは、たとえわかっていたとしても、学校の先生ではどうしようもないことがある。けれど、問題は、先生の心と目だ。長い間、同和教育に専念して来た和泉先生(*当時、八幡小学校の教員)が言った。

「非行児こそ、教育の宝なんだ」

(続く)

*上の写真、左から山下政男支部長・八幡教会の浜さん・岡林信康さんという、貴重なショットです。

明日をつくる仲間<前編> 部落解放同盟八幡支部

支部長の山下さんは、くつのくぎを打つ手をとめた。その手をがっしりと胸に組むと、身じろぎひとつしない、厳肅(げんしゅく)な事ごらのように、その話をしてくれた。

「若いもんの結婚話に、警察が口つっこみよったんですな。△△町の〇〇のとこの若いもんが、勤め先で好きな女の子づくりよりましてな、結婚しようといところまで行きよりました。ところが女のうちじゃあ、△△町のもんは部落やゆうて許さんのですわ。男の方が荒れよりましてな。勤め先はやめてしまおうし、おまけに、女のうちへとなりこんだんですなあ。女のうちじゃ、こわなって、警察へ行きよった、とこないなわけですわ」

下くちびるに歯のあとが残った。

居たたまれない気持ちが、山下さんの足を警察へ向けた。

「くやしいやないですか。警察はペコペコしよって、なんやかや言いわけしよって…。心の底では、悪いやつは部落のもんやと思うとる」

ひとりの青年の話…。

「学校の校庭で野球やりよったんや。久しぶりで、気持ちようパットふりまわしてな。思いつ切りふりまわしてやったんや。よう飛びよった。そいでな、校舎の窓ガラス割ってしもたんや。それやのに、あのハゲ頭の校長のドアホ、ワシがあばれて、パットふりまわして、窓ガラス割ったと、ポリに言いやがった。あいつら、いつもこうや」

“悪いのは、いつも部落のものだ。だから、部落のものには近づくな”という論理が絶えず部落の人たちを苦しめる。

「扉をひらく若者たち」(パート2) ～八幡からの通信～はどこにある



今、事務局では1970年前後の青年たちの活動記録(解放キャンプなど)が掲載された雑誌や古い写真の提供を受けて、その当時の人々の動向をあれこれ探っている。

同じ様に、たまたま先日、坂本へ出かけたら、1977年にBBC(びわ湖放送)で放映された、坂本青年部の活動を紹介した番組「扉をひらく若者たち」～坂本からの通信～(30分)を見る機会に恵まれた。

そこには、青年部の連中が地元の日吉中の先生たちと学習会について、どうあるべきかといったシビアな問題を真剣に話し合う場面や、やんちゃな中学生を集めてソフトボールの試合をしている様子が映し出されていた。

また、同対事業で取り壊される前の古い民家や街並みの映像も流れていた。実はこの番組、パート2として、八幡の堀上での青年部活動も取り上げられ、放映されていたのである。その貴重な記録(ビデオテープ)が、きっと八幡のどこかにはあるはずなのだ。

ぜひ、パート2～八幡からの通信～を「発掘」して欲しい～。

(TK)

*上のスナップは、当時青年部で活動されていた中村さんからお借りした「解放キャンプ」主催者の集合写真です。映っている人たちは、知らない若者が多いのですが、西井義さん・岡部稔さん・岡林信康さん・東岡山治さん・岡山禮樹さんらが確認できました。

海外よもやま話③⑧

「川は流れてどどここ行くの 人も流れてどどここ行くの」

風の吹くまま気の向くまま、明日の宿は明日決める、海外放浪一人旅。今日はモンゴルのお話。

「かわ～はながれ～てとことこゆく～の～♪」

ウランバートルの孤児院で、子どもたちといっしょに歌った思い出の曲です。チャリティーイベントで、日本人観光客から募金してもらうために、練習して歌いました。

僕がモンゴルに行ったのは夏だけど、ふと「あの子どもたちは元気かなあ」と思うのは、今頃の寒い季節です。マンホールチルドレンだった子がせっかく衣食住の整った孤児院に入れたのに、冬の寒い夜中に孤児院を抜け出し、明朝凍死した姿で見つかった。そんなことがあったからです。

あの子どもたちが無事大人になり、良き人生を送ってくれていることをいついつまでも願っています。

(K.Kisuke)

